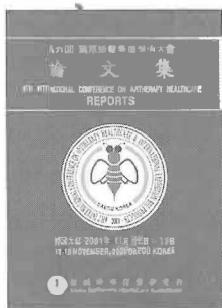


ニュース

第6回国際蜂療保健学術大会

韓国大邱市で、韓国蜂療保健研究会（高相基会長）主催で、標記の大会が11月12-13日、2日間にわたって開催された。日本からも多数の参加があり、学術発表で、玉川大学大学院農学研究科の笠原麗美さん（「成分分析からみたプロポリスの多様性」）と（株）クキンビーガーデンの吉垣茂氏（「アピセラピー素材としてのミツバチ生産物のミツバチコロニー内での機能」）が、それぞれ金賞、銀賞を受賞した。



韓中日英4か国語で出版された論文集

第5回アピセラピー学術講演会

プロポリス研究者協会（PRA、松香光夫代表）主催の標記の講演会が玉川大学農学部第Ⅱ校舎502番教室を会場に、11月23日に開催された。M. Ramirez 博士（ウルグアイ専門医学研究所）、S. Stangaciu 博士（ルーマニア・ドイツアピセラピー協会会長）、K. S. Woo 教授（韓国国立ソウル大学）、水上治博士（東京衛生病院）がそれぞれ講演を行った。参加者は約50名。



左上から時計回りに、Ramirez 博士、Stangaciu 博士、水上博士、Woo 教授

海外の研究者の来訪

国内で開催された学術会議に参加のため来日されたミツバチ関係の研究者の来訪が相次いだ。ミツバチの脳や学習能力、情報処理などの権威である3名がミツバチ科学研究施設に来訪し、それぞれセミナーを開催した。

10月17日（水）アメリカ、オハイオ大学昆虫学部 Brian H. Smith 教授。

10月20日（土）ドイツ、ベルリン自由大学生物・化学・薬学部 Randolf Menzel 教授。

11月2日（金）オーストラリア国立大学生物科 M. V. Srinivasan 教授。



左から Smith 教授、Menzel 教授、Srinivasan 教授

編集後記 結局本号も大幅に遅れてしまい、2001年度中に発行時期を正常の軌道に戻すことができず、多くの方からお叱りをいただきました。実は産みの苦しみの今号は、ハチミツの国際基準が更新されたのを受けて「ハチミツ特集」として、種々の論文を掲載する予定で早くから進んでいた。それが期待した一部の記事がキャンセルとなり時間がかかってしまった。急遽お願いして記事をいただいた方にも、急がせたわりに刊行が遅くなり、ご迷惑をおかけしてしまいました。1年分のお詫びをしたい。

さて本題。ハチミツの国際規格の見直しがかっけで、思わずハチミツの勉強をしてみたが、やはりハチミツは面白い。ローヤルゼリーやプロポリスのような華やかさはないのかも知れないが、都内のデリカテッセンがグルメ雑誌の人気投票で第1位になり、その店のシンプルなハニートーストが表紙を飾ったり、業務用は着実に伸びているということだ。もっとハチミツのよさをもっとうまく伝えられないか、というのは生産・販売に携わっておられる方々共通の悩みかも知れないが、今号が少しでも参考になればと思う。今後有機養蜂や、食用以外のハチミツの用途の拡大など、まだまだ日本ではなじみの少ない分野が入り込んでくるだろう。

養蜂巣箱の腐蝕病菌の放射線による消毒は、実用技術として利用の拡大が進むよと思っている。健康な生産環境あってこそそのミツバチ生産物である。（純）